

# Harry Potter シリーズにおける笑い

## —The Dursleys の場合—

三池 洋江

### はじめに

本論文では、J. K. Rowling (1965) 著 *Harry Potter* シリーズ全7巻を取り上げる。シリーズ全7巻とは、*Harry Potter and the Philosopher's Stone* (以下、*The Philosopher's Stone*)、*Harry Potter and the Chamber of Secrets* (以下、*The Chamber of Secrets*)、*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* (以下、*The Prisoner of Azkaban*)、*Harry Potter and the Goblet of Fire* (以下、*The Goblet of Fire*)、*Harry Potter and the Order of the Phoenix* (以下、*The Order of the Phoenix*)、*Harry Potter and the Half-Blood Prince* (以下、*The Half-Blood Prince*)、*Harry Potter and the Deathly Hallows* (以下、*The Deathly Hallows*) である。

本シリーズの特徴の一つに、作品全体に見られるコメディの要素が挙げられる。例えば、井辻朱美は、本シリーズの特徴として、悲しみを帯びた場面でも喜劇的な要素を含んで描かれることを指摘している。

どのような深刻な文脈においても、それから逸脱したもう一本の文脈が併走しており、たえずそちらに飛び移り、また飛びもどりしながら物語が進むので、主人公たちは完全に悲愴な気分、憎悪や自己憐憫の気分をまっとうすることができずにいる。(井辻 119-120)

深刻な場面でもユーモアが挿入されるという本シリーズの性質は、第1巻 *The Philosopher's Stone* の第1章ですでに現れており、Minerva McGonagall が主人公 Harry Potter の両親の死の真相を Albus Dumbledore に聞こうとする場面からも窺える。教え子の安否を気にする McGonagall とは対照的に、Dumbledore がレモン菓子や耳あての話を入れることでユーモアに溢れた会話となっている。

*Harry Potter* シリーズのコメディ要素の一端を担う登場人物に the Dursleys がいる。The Dursleys は、Harry の母親と姉妹の Petunia、その夫 Vernon、息子の Dudley の3人で構成される。彼らは Lily Potter と James Potter の死後、孤児 Harry

を唯一の肉親として引き取った親戚家族である。彼らの甥っ子への対応は酷く、*The Philosopher's Stone* では Harry を物置に寝かせ、冷たい仕打ちをしている。作中で描かれるほとんど唯一の Muggle であり、魔法を極端に怖がり、魔法使いの Harry を忌み嫌う存在である。彼らについては、Harry への冷酷な行動にもかかわらず、喜劇的な要素が指摘されている。Jack Zipes は “They [The Dursley family] are so plainly uncouth and comical that they pose no great threat to Harry, who always finds a way (through cleverness or help from friends) to avoid them.” (181-182) と述べ、the Dursleys が非常にコミカルに描かれるため、虐待の脅威は大きくないと指摘している。だが、これまで、彼らが引き起こす笑いの特徴やどのような効果を Harry に与えているのか詳細な分析はあまりされてはこなかった。また、彼らの喜劇的な要素は、とりわけ第 1 巻 *The Philosopher's Stone* から第 4 巻 *The Goblet of Fire* までに描き出されているが、その後の第 5 巻 *The Order of the Phoenix* では減少している。しかしながら、先行研究では、第 5 巻以降の the Dursleys に関して言及されることはあまり多くない。そのため、本論文においては、笑いという視点で彼らを読み解くことによって、本シリーズにおける the Dursleys という登場人物の役割分析をより深め、*Harry Potter* シリーズに新たな光を当てることを目的とする。

## 1. 困難を回避させる笑い

The Dursleys は、Harry を虐げてきた家族である。しかし、彼らの滑稽な姿は、Harry に精神的な優位を与え、彼らの冷たい対応を乗り切る術を与える。笑いが Harry を困難な状況から助ける力になっていることをここでは述べる。

The Dursleys は魔法を極度に恐れ、魔法とできるだけ関わらない生活を試みてきた。Harry は、存在を無視され、望むものは与えられず、疎外されてきた。Harry 少年は彼らの冷酷な行為に心を痛め、精神を病んでも不思議ではない状況にいる。けれども、彼がそうならなかったのは、一つには、虐待者である the Dursleys の滑稽な面を笑うことができたからである。The Dursleys の魔法に対する行動は、非常に大袈裟で滑稽に描かれる。例えば、Harry に Hogwarts から手紙が送られた際には、魔法との関わりを恐れた Vernon おじさんはフルーツケーキで釘を打とうとする。

‘Oh, these people’s minds work in strange ways, Petunia, they’re not like you and me,’ said Uncle Vernon, trying to knock in a nail with the piece of fruit cake Aunt Petunia had just brought him. (*The Philosopher’s Stone* 34)

その他にも、手紙が送られてこないよう離れ小島の小屋に突然行く、Petunia は手紙をミキサーで粉々にしようとするなど、魔法を怖がるあまりに滑稽な姿を Harry にも読者にも目に見える行動として表す。彼らは、魔法が怖いという弱みや動揺、欠点を曝け出す。それらを見せることで、Harry にとって何を考えているか分からない恐ろしい存在ではなく、考えていることが把握できる存在となる。Harry が魔法学校へ入学後もその滑稽な態度は健在である。

‘You’ve forgotten the magic word,’ said Harry irritably.

The effect of this simple sentence on the rest of the family was incredible: Dudley gasped and fell off his chair with a crash that shook the whole kitchen; Mrs Dursley gave a small scream and clapped her hands to her mouth; Mr Dursley jumped to his feet, veins throbbing in his temples.

*(The Chamber of Secrets 7-8)*

The Dursleys は魔法なるものを非常に恐れている。そうした感情が行動として明白に表される。その反応は、Harry にとっても “incredible” な効果と評され、大げさな動作として表現される。

本シリーズの特徴について、Maria Nikolajeva は “The novels are clearly action-oriented rather than character-oriented” (236) と指摘している。指摘の通り、彼らが動揺や恐怖を行き過ぎた行動 (action) として表すため、絶対的な虐待者という印象は弱くなるだろう。The Dursleys の馬鹿馬鹿しい言動は周囲に晒され、Harry にとって彼らは笑いの対象となる。

As he [Harry] looked at Dudley in his new knickerbockers, Uncle Vernon said gruffly that it was the proudest moment of his life. Aunt Petunia burst into tears and said she couldn’t believe it was her Ickle Dudleykins, he looked so handsome and grown-up. Harry didn’t trust himself to speak. He thought two of his ribs might already have cracked from trying not to laugh.

*(The Philosopher’s Stone 29)*

Dudley の新しい制服姿に Petunia と Vernon が感激する様子には親バカの醜態が表れている。彼らの反応とは対照的に、Harry は笑いを我慢しようとしてあばら骨が二本折れそうになる。彼らが滑稽で笑えるということは、Harry が虐げられるものでありながらも悲観的になりすぎない材料となる。笑えるということは Harry の自己

肯定を崩さないのである。Harry が冷酷な態度に耐えられたのは、滑稽な態度を笑うことが彼に優越感を与えるからであろう。

The Dursleys について Julia Eccleshare は “The extent of Harry’s rejection from his unloving home initially serves to define his lot as miserable but, by dismissing the Dursleys so contemptuously, Rowling takes away from Harry’s grief. Not being loved by the Dursleys is a blessing as it is clearly not a love worth having.” (96) と述べている。一家が軽蔑すべき存在として描かれることで、彼らに愛されない自分を Harry が肯定できる理由となる。彼らへの軽蔑を生む要因は、the Dursleys の魔法への極端な対応や親バカな考え、甘やかされた息子の強欲さなどが挙げられるだろう。拙論「『ハリー・ポッター』シリーズにおける笑い—Fred と George の場合—」では Fred と George について笑いを引き起こす人物として取り上げた。彼らは、人をからかうことで周囲に笑いをもたらす。からかうことは、物事から面白いと思われる側面を想像力で自ら探し出し、その面をからかう対象や周囲に伝える行為である。彼らには、人を笑わせようという意図がある。対して、the Dursleys の言動は意図的に人を笑わせようとするものではなく、自然な振る舞いが Harry を笑わせている。彼らが故意に馬鹿げた行為を行わないからこそ、Harry は一家を軽蔑し、彼らを笑うことによる Harry の優越感は高まる。The Dursleys のおかしい動作は Harry に優位な立場を与え、虐待の辛さを和らげる効果がある。笑いは Harry の困難な状況に対して見方を変えさせ、それを切り抜ける力となっている。

## 2. 大人と子どもの関係を反転させる笑い

第1章では、the Dursleys を笑えることは、Harry に優位な立場を与えることを述べた。その笑いの特性は、大人と子ども、強者と弱者の関係を揺るがす効果もある。

児童文学研究者の Maria Nikolajeva は Mikhail Bakhtin の carnival 理論<sup>(1)</sup>と児童文学に類似点を見つけ出し、以下のように説明する。1. 児童文学の中では、本来なら大人の作ったルールに従わなければならない子どもが強く、勇敢になり独立することが許される (Nikolajeva 227)、2. 子どもが力を持つのは限られた時間だけで、たいていは安全な家庭や親の監視下に戻ることになる (Nikolajeva 227)、3. 物語は、大人が子どもに課すルールは実際のところ恣意的であると示す効果を持つ (Nikolajeva 227)。Nikolajeva は、上記の観点から直接的に本シリーズの笑いを考察してはいない。だが、彼女が carnival 理論を通じて説明する児童文学の特徴は、the Dursleys がもたらす笑いの効果に示唆を与える<sup>(2)</sup>。

The Dursleys は孤児の Harry を引き取った保護者の立場にある。Harry は Muggle 世界では衣食住を彼らに支えられている身分であり、彼らの関係は対等ではない。したがって、プライベート通りでは、Harry は魔法使いと分かる前も分かった後も Harry の保護者である一家のルールに従わなければならない。しかし、the Dursleys の馬鹿げた行動を笑っている限られた時間は、Harry に the Dursleys よりも精神的な優越感、優勢な立場をもたらす。Harry は、親戚一家の馬鹿げた行動に対して、虐待者に対する見方を変える。ユーモアについて数々の論を発表してきた哲学研究者 J. モリオールは「笑うためには、さし迫った実際の必要から解き放たれた状態にあるのでなければならない」(168) と述べている。例えば、コブラが目の前に現れた時には笑うよりも逃げることを優先することになるが、物理的、精神的な距離ができていればその状況を笑うことは可能である (モリオール 168)。笑いは、すぐそばに存在する困難から心を放した際に生まれる。冷たい仕打ちをされているという眼前の苦しい事実から解放された状態へと Harry を誘引する笑いは、虐待という鋭い牙を柔らかくする効果がある。

Harry は、夏休み期間中はプライベート通りに戻り、少なくとも休暇の最初はそこで過ごさなければならず、その間は彼らのルールを守らなければならない。一方で、笑いは権威者の権威をはぎ取り、反転した関係を一時的にもたらす。そのため、彼らの強者ではない一面を見ることができ、Harry は彼らに対して虐待者としてではない異なる見方ができるようになる。それゆえ、虐待されながらも、決定的な精神破壊は起こることはない。The Dursleys への笑いは、Nikolajeva が提示する児童文学の特徴のように、the Dursleys のルールに従いながらも Harry を優位な位置に移動させ、虐待者や虐待への新しい見方を供給するのである。笑いは強者の違う一面を見せてくれ、強者と弱者の反転を一時的ながらも起こすことが分かる<sup>(3)</sup>。

The Dursleys が引き起こす笑いが、大人と子どもの力関係を逆転させる点をここまで述べた。しかし、必ずしも笑いが両者の力関係を逆転させるとは限らない。そのような例として、ここでは Roald Dahl 作品を取り上げる。Eccleshare が “Harry’s demeaning treatment as a servant at the hands of the Dursleys at the beginning of *Harry Potter and the Philosopher’s Stone* closely mirrors the experiences of James in Dahl’s *James and the Giant Peach* (1961).” (11) と指摘するように、the Dursleys は、Dahl 作品の登場人物と比較されることがある。Dahl 作品での子どもと子どもを圧迫する大人との関係を見ることで、*Harry Potter* シリーズにおける the Dursleys の笑いの特異性が明確になるはずである。

John Kornfeld と Laurie Prothro は、the Dursleys と *James and the Giant Peach* に登場する Aunt Spiker と Aunt Sponge を比較し、“Yet, as horrible as Trotter’s and Potter’s

guardians may be, it is difficult to take them terrible seriously. As one-dimensional characters, their treatment of the boys reads more like farce than tragedy.” (122) と述べている。例に挙げられている *James and the Giant Peach* では、Harry と同様に孤児の James Henry Trotter 少年をおば二人が引き取り、the Dursleys のように彼を冷たく扱う。彼のおばたちは、the Dursleys と同様に、主人公を虐める役割を割り当てられ、自分たちを美女と信じ込む喜劇的な描かれ方をされる。だが、James は Harry とは違い、おばたちの仕打ちに対して涙を流し、今後のことを考えて落ち込む。Harry が親戚を笑うように、彼女たちのおかしな言動に笑っている様子はあまり見られない。

Dahl の他の作品 *Matilda* では、主人公 Matilda Wormwood は、賢い娘を否定する両親に対して怒り、復讐を企て実行する。この場合も、知識欲旺盛で読書家な彼女に対し、お金儲けや見た目のことばかりに気を取られ、家ではテレビ番組を夢中で観ている馬鹿な両親は滑稽に描かれる。読書熱心で賢い Matilda を非難する両親に対して、彼女は笑うよりも怒り、持ち前の頭脳で彼らを罠にかけ、満足する。両親を罰することで自己を保つのである。あまりにも横暴な態度の Agatha Trunchbull 校長に対しても、怒りをたぎらせ、突然身についた超能力と彼女の賢さの合わせ技で校長を追い出すことに成功している。Eccleshare は、Dahl の描く大人について、“Dahl is largely subversive in promoting the notion that adults should be neither emulated nor respected” (36) と述べている。大人は尊敬すべき存在として描き出されず、子どもたちは各々のやり方で大人を出し抜く力を得ていく。上述の Dahl 作品では、Harry のように笑うことで大人との摩擦を切り抜けるということはあまり描かれなない。笑いによって大人と子どもの関係性に変化をもたらすことが the Dursleys の笑いの特異性であることが分かる。

また、the Dursleys の笑いが弱者に力を持たせる一方で、同じ *Harry Potter* シリーズに登場する Voldemort が引き起こす笑いは、上の立場の者が下の立場の者を嘲笑する笑いである。Voldemort は、部下の Death Eaters が集まる場で、“I’m talking about your niece, Bellatrix. And yours, Lucius and Narcissa. She has just married the werewolf, Remus Lupin. You must be so proud.” (*The Deathly Hallows* 16) と Bellatrix Lestrange と Narcissa Malfoy の姪が狼人間と結婚したことをからかう。それを聞いた Death Eaters も彼らを嘲笑して騒ぎ立てる。この場面では、Voldemort の思想に沿わない親戚の存在、その恥を周りに知らせ笑いものにするという辱めであり、一種の罰である。Voldemort の熱狂的な信者であり、からかいの対象である Bellatrix の様子が著しく悪化することもその証拠である。敬愛する Voldemort に身内の恥をからかわれ、Voldemort の寵愛を競う Death Eaters に笑われることで、姪や

その夫に対する Bellatrix の強まる敵意が生み出される。Voldemort の行為は、他の Death Eaters に対しても、失態があれば許されず、嘲笑されるから気を付けるようにという脅しにもなる。Voldemort のもたらす笑いは、上の立場の者と下の立場の者との関係をより強固にするものであり、決して反転は生み出さない。他作品、他の登場人物との比較で分かるように、the Dursleys の笑いは、大人と子ども、強者と弱者の関係に反転という変化をもたらす特異性を持つ。

### 3. 安全圏を作り出す笑い

ここまで、笑いが虐待を和らげ、大人と子どもの力関係に影響を及ぼしていることを示した。しかし、第5巻 *The Order of the Phoenix* からは、the Dursleys のいる Muggle 世界でも笑いが減っていく。その影響から見える笑いの効果について述べる。

The Dursleys は、魔法を嫌悪することで魔法使いの Harry を虐げている。Perry Nodelman と Mavis Reimer が fairy tale の登場人物の特徴として “fairy-tale characters may be said to occupy one stable role or position in their story.” (315) と示しているが、彼らは fairy tale の人物のように虐待者としての固定的な役割を作品内で受け持っている<sup>(4)</sup>。自らの担う役割に従い、彼らは作品随所で感情を目に見える形で行動している。*The Chamber of Secrets* では、Harry と Ron Weasley が空飛ぶ自動車で Hogwarts に向かい、道中で Muggle に目撃されるという退学手前の行為をする。その処罰の一環として、Dumbledore から保護者宛にその旨を報告すると告げられる。その時の Harry の反応は、“As for Dumbledore’s writing to the Dursleys, that was nothing. Harry knew perfectly well they’d just be disappointed that the Whomping Willow hadn’t squashed him flat.” (*The Chamber of Secrets* 65) である。The Dursleys にとっては Whomping Willow が Harry を潰さなかったことだけが残念であろうと Harry は推測する。The Dursleys の反応を Harry が彼らのいない魔法世界でも想像することによって、彼を嫌う一家の役目が思い出される。そして、その役割の特徴がより強い印象を残し、増していく。Zipes は第4巻 *The Goblet of Fire* までは *Harry Potter* シリーズは全て同じような展開を見せることを指摘し、“but if you’ve read one, you’ve read them all: the plots are the same, and in my opinion, the story lines become tedious and grating after you have read the first.” (176) と述べている。The Dursleys と Harry との夏休み期間の生活も同じ展開の一つとして含まれ、彼らは第4巻までは大きく変わることはない描かれ方で、Harry を虐める役をまっとうしようとする。

だが、第5巻 *The Order of the Phoenix* 以降のシリーズ後半では、彼らの喜劇は影をひそめる。それはなぜなのだろうか。その理由を確認していこう。*The Order of the Phoenix* では、プリベット通りに Azkaban 刑務所の看守 Dementor が現れる。Harry から Voldemort が復活したのが Dementor 出沒の理由ではないかと聞かされると Petunia は動揺する。

Aunt Petunia had never in her life looked at him like that before. Her large, pale eyes (so unlike her sister's) were not narrowed in dislike or anger, they were wide and fearful. The furious pretence that Aunt Petunia had maintained all Harry's life - that there was no magic and no world other than the world she inhabited with Uncle Vernon - seemed to have fallen away.

(*The Order of the Phoenix* 39)

今まで一度もしなかった目線で自分を見たと感じ、Harry は Petunia の変化に気づく。魔法に対する大げさで滑稽なこれまでの対応とは異なり、彼女は、Voldemort 復活の危険を理解し、喜劇的とは感じられない怖がり方を見せる。Dementor とは人の幸せな気分を奪い、絶望を与える生き物である。この生物に遭遇した Dudley の心身の苦痛は、以下のように説明される。

He [Dudley] gestured at his massive chest. Harry understood. Dudley was remembering the clammy cold that filled the lungs as hope and happiness were sucked out of you.

'Horrible,' croaked Dudley. 'Cold. Really cold.' (*The Order of the Phoenix* 33)

ここで描かれている Dudley の痛みは、第1巻で “Dudley was dancing on the spot with his hands clasped over his fat bottom, howling in pain.” (*The Philosopher's Stone* 48) のように豚の尻尾が生えて大騒ぎしたり、第4巻で魔法の菓子を食べて舌が大きくなる “he [Dudley] was gagging and spluttering on a foot-long, purple, slimy thing that was protruding from his mouth.” (*The Goblet of Fire* 47) といったドタバタ劇でのそれとは異なる。Harry 自身も Dementor が現れたことで、“The arrival of the Dementors in Little Whinging seemed to have breached the great, invisible wall that divided the relentlessly non-magical world of Privet Drive and the world beyond.” (*The Order of the Phoenix* 39) と魔法世界と Muggle 世界の壁が崩れたという感覚に陥る。Dementor は、Voldemort の復活を証言する Harry を黙らせるため、



Ministry of Magic の役人 Dolores Umbridge が送り込んだ。これまでは、Voldemort と Harry の戦いなど、the Dursleys には関係のないことであった。しかし、Voldemort の復活は、Dementor の侵入を招き、Harry が感じたように、魔法世界と Muggle 世界の壁を壊し、Muggle 世界にも危険を持ち込むことになる。そうして、喜劇として機能していた the Dursleys の生活にも影を落とす。

Harry がお互いに嫌い合っている the Dursleys と暮らしているのは、Lily が Harry にかけて保護の魔法を Dumbledore が拡大させたことが一つの理由である。Dumbledore のかけた魔法は、肉親である the Dursleys と共に暮らせれば Voldemort から手を出されないというものであった。

‘While you can still call home the place where your mother’s blood dwells, there you cannot be touched or harmed by Voldemort. He shed her blood, but it lives on in you and her sister. Her blood became your refuge. You need return there only once a year, but as long as you can still call it home, whilst you are there he cannot hurt you. [...]’ (*The Order of the Phoenix* 737)

血縁関係にある Petunia の家にいる限り、Harry は Voldemort の魔の手から逃れることができる。The Dursleys の家に滞在することは、一種の安全圏にいることになる。これは一見、Harry が守られているようで、the Dursleys も危険な魔法使いから守られていることを意味する。最終巻の第7巻 *The Deathly Hallows* で the Dursleys は魔法使いに付き添われ、安全な場所へ隔離される。何故なら、Harry が Vernon に説明するには、“The Order is sure Voldemort will target you, whether to torture you to try and find out where I am, or because he thinks by holding you hostage I’d come and try to rescue you.” (*The Deathly Hallows* 33) と the Order of the Phoenix が考えているからである。The Dursleys も Voldemort 一味から標的にされ、攻撃される危険がある。これまで、プリベット通りにいる間は Harry も一家も保護されてきた。“[R]efuge”であるのは、Harry にとっても一家にとってもそうなのである。Lily が愛する息子にかけて魔法は、Dumbledore によって、肉親の一家をも守ってきたと言える。

この魔法以外に、the Dursleys の安全圏を補強するのが笑いである。彼らの言動は、第1章、第2章で見てきたように、滑稽な要素にコーティングして描かれ、それが Harry に笑われている。彼らの言動が笑いの要素で覆われているため、Harry が精神的な痛みを強く感じることは回避されてきた。したがって、プリベット通りにいる間は、笑いに包まれることによって、真の痛みを感じることもない一種の安全圏内

にいることになる。対して、Hogwartsでは、HarryはVoldemortとの生死をかけた戦いで身体は傷つき、亡き人々への思慕、友人との諍いなどで心を強く動かされる。HarryはMuggle世界では魔法世界とは違い、深刻な痛みから守られてきた。だが、第5巻 *The Order of the Phoenix* からは、これまで笑える役割として描かれ、安全圏にかくまわれていた一家が、今までにない危機や葛藤に襲われることで、安全圏の崩壊が徐々に引き起こされた。また、Harryがthe Dursleysの家に滞在しているときには、Voldemortから危害を加えられないという魔法も揺らぐ。魔法世界の暗さがMuggle世界にも影響を及ぼし、彼らの描かれ方にも変化を与え、安全圏にいたthe Dursleysの変化が、魔法世界の危機的状況を一層感じさせるものとなる。The Dursleysの虐待者、絶対者という要素は、本物の死をもたらすVoldemortの復活により弱まることになる。Harryも魔法世界のことが気になり、彼らとの生活で一喜一憂することは少なくなる。それと同時期に、彼らの滑稽な部分も多くは見られなくなる。

以上の通り、第5巻 *The Order of the Phoenix* 以降、the Dursleysは、Voldemortが引き起こす生死を脅かす魔法界全体の恐怖に飲み込まれ、Harryの敵対者という立場をVoldemortに譲ることになる。ゆえに、彼らは舞台から退場していった。

しかしながら、最終巻であっても、Vernonは、最後まで魔法に嫌悪感を持ち、振り回される滑稽な面を見せることで、Harryに笑われている。

Harry looked up at his uncle and felt a mixture of exasperation and amusement. Vernon Dursley had been changing his mind every twenty-four hours for the past four weeks, packing and unpacking and repacking the car with every change of heart. Harry's favourite moment had been the one when Uncle Vernon, unaware that Dudley had added his dumb-bells to his case since the last time it had been unpacked, had attempted to hoist it back into the boot and collapsed with roars of pain and much swearing. (*The Deathly Hallows* 32)

Vernonの行為に対してHarryは笑いを誘われ、“Harry laughed; he could not help himself. It was so very typical of his uncle to put his hopes in the establishment, even within this world that he despised and mistrusted.” (*The Deathly Hallows* 33)とVernonは何も変わらないという感想を抱く。また、PetuniaもHarryと和解しようとするDudleyの成長に感激するなど以前と変わらぬ親バカな様子を見せる。とはいえ、PetuniaはVoldemortへの恐怖心を見せ、Lilyとの血縁関係を感じさせる場面があった。だが、VernonはDementorからDudleyを救ったHarryを追い出そう

とするなど、これまでと同様、魔法嫌いを貫き、魔法にあたふたした姿を見せる。Vernon が魔女 Lily と血縁関係のない非魔法族であるからなのどうかは考察の余地はあるが、いずれにしても、the Dursleys は虐待者という面やコミカルな面を減らしていく。Voldemort と戦う責務を負い、仲間や自分の命に関わる戦いをする Harry にとっては、the Dursleys の脅威は茶番劇に変わり、彼らに振り回される出来事は遠い昔のものとなる。笑いという武器によって Harry が虐待を乗り越えていた時期が終わり、笑いが減らされると同時に安全圏の消失が起こる。それによって、魔法世界と Muggle 世界の一体化が進められ、本シリーズの陰鬱な雰囲気は一層強く描き出される。笑いは、真の危機から Harry を保護する効果を持っていたのである。

## おわりに

The Dursleys を笑いという視点で考えた際に、困難を回避させる笑い、大人と子どもの関係を反転させる笑い、安全圏を作り出す笑いが見えてきた。彼らの滑稽さを笑うことは、虐げられる者でありながら困難な状況の見方を変えることができ、それを乗り越える一つの手立てとなり得る。Harry は優位な立場に移動し、彼らが絶対的な強者でないという見方を持つ。よって、笑っている間は強者と弱者、大人と子どもの関係を反転させる。笑えることで、虐待者に対抗することができ、悲しみに飲み込まれることなく、自尊心を保つことができるのである。悲観する心を笑いが邪魔し、陰鬱な気分をまっとうできないからこそ、Harry は虐待を耐えられたのであろう。

笑いを交えて描かれることは、状況の辛さを弱めるだけでなく、心身の深刻な痛みからも引き離す一種の安全圏を作り出す。第5巻 *The Order of the Phoenix* では安全圏を確保する笑いが減らされることで、物語の暗さを一層押し出し、魔法世界と Muggle 世界のこれまでにない融合が強められた。

The Dursleys の笑いを分析することで、Muggle 世界での安全性を保持し、また物語の陰鬱さをその増減で示す本シリーズでの笑いの役割が見えた。

(本論文は、2019年11月30日、12月1日に開催された日本イギリス児童文学会(現:英語圏児童文学会)第49回研究大会第1日目にて行った発表『「ハリー・ポッター」シリーズにおけるダーズリー一家」に加筆修正を行ったものである。)

## 注

- (1) Mikhail Bakhtin は、*Problems of Dostoevsky's Poetics* の中で carnival について説明している。それによると、carnival は、その期間中、社会的階層の不平等や、その他の形態の不平等が停止されるという特徴を持つ (Bakhtin 122-123)。また、“Carnival is the festival of all-annihilating and all-renewing time.” (Bakhtin 124) と説明されるように、carnival は再生を引き起こすお祭りでもある。Maria Nikolajeva は、この carnival の特徴を 1. 限られた carnival の期間では、現在の秩序が反転する (Nikolajeva 227)、2. carnival 期間の終了と共に元の秩序に戻る (Nikolajeva 227)、3. carnival は社会的ヒエラルキーが完全ではないと気づかせる効果がある (Nikolajeva 227) と提示している。
- (2) The Dursleys が Harry にもたらす笑いは、Mikhail Bakhtin が carnival 理論の中で提示する carnival の笑いとは相違がある。Bakhtin は『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』の中で、carnival の笑いを「**全民衆的**」(太字原文) (18) で、「**すべての人が笑う**」(太字原文) (18) ものとした。また、「自分自身を笑われる現象の外に置き、笑われるものに自分を対置する」(18) ものではないとし、carnival の笑いを「生成する全世界の観点を表現しており、笑う者自身がこの世界の一員」(18) となるものとしている。だが、本論文で論じた the Dursleys の笑いは、Harry が世界全体を笑うのではなく、the Dursleys の滑稽な姿を笑う。一家も Harry と同時に笑うことはない。Bakhtin の carnival の笑いではなく、Maria Nikolajeva が Bakhtin をヒントとして得た児童文学の特徴 3 点を参考に本シリーズの笑いを分析した。
- (3) Muggle には使えない力を持つ魔法使いであるという点も Harry の心にゆとりを持たせてくれる。Harry は魔法を恐れる the Dursleys の弱みを理解し、密かに弱みに付け込んで楽しんだり交渉術に役立つ場面もある。ルールに従っているようで Harry は抜け道を探して楽に過ごそうと工夫もすることもある。その一方で、未成年の魔法使いは休暇中に魔法が使えないという魔法世界の規則も存在し、the Dursleys のもとにいるときは魔法界のルールも the Dursleys のルールも守らなければならない。基本的には Muggle よりも優位な力を持つ魔法使いであっても、大人の作る規則に従わなければならない。だが、魔法は Harry に精神的な優位をもたらす一助にはなる。
- (4) Maria Nikolajeva は “Harry’s triumphant ascent from his oppressed position with the Dursleys to fame, perpetual riches, and his privileged existence at

Hogwarts is an easily recognizable fairy-tale pattern.” (232) と述べ、Jack Zipes は “The plots of the first four novels thus far resemble the structure of a conventional fairy tale” (177) と指摘している。

## 使用テキスト

- Dahl, Roald. *Matilda*. 1988. New York: Puffin Books, 1990.
- Dahl, Roald. *James and the Giant Peach*. 1961. London: Puffin, 1995. Puffin Books.
- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury Publishing, 1997.
- . *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury Publishing, 1998.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury Publishing, 1999.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury Publishing, 2000.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury Publishing, 2003.
- . *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury Publishing, 2005.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury Publishing, 2007.

## 引用文献

- Bakhtin, Mikhail. *Problems of Dostoevsky's Poetics*. Edited and translated by Caryl Emerson. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1984. *Theory and History of Literature*; v. 8.
- Eccleshare, Julia. *A Guide to the Harry Potter Novels*. London: Continuum, 2002. *Contemporary Classics of Children's Literature*.
- Kornfeld, John, and Laurie Prothro. “Comedy, Quest, and Community: Home and Family in Harry Potter.” *Critical Perspectives on Harry Potter*. Edited by Elizabeth E. Heilman. 2nd ed., New York / London: Routledge, 2009. 121-137.
- Nikolajeva, Maria. “Harry Potter and the Secrets of Children's Literature.” *Critical Perspectives on Harry Potter*. Edited by Elizabeth E. Heilman. 2nd ed., New York / London: Routledge, 2009. 225-241.

- Nodelman, Perry, and Mavis Reimer. *The Pleasures of Children's Literature*. 3rd ed., Boston: Allyn and Bacon, 2003.
- Zipes, Jack. *Sticks and Stones: The Troublesome Success of Children's Literature from Slovenly Peter to Harry Potter*. New York: Routledge, 2001.
- 井辻朱美『ファンタジーを読む 「指輪物語」、「ハリー・ポッター」、そしてネオ・ファンタジーへ』、青土社、2019年
- バフチーン、ミハイール『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、川端香男里訳、せりか書房、1973年
- 三池洋江「『ハリー・ポッター』シリーズにおける笑い—Fred と George の場合—」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』（白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集編集委員会）第22号、白百合女子大学児童文化研究センター、2019年、141-158頁
- モリオール、J.『ユーモア社会をもとめて 笑いの人間学』森下伸也訳、新曜社、1995年